



シンポジウム

# 映画『歓待』を テツガクする

——主客不分明の時代における包摂と排除

『歓待』上映情報

大阪アジア映画祭 2011

「特集企画 Directors in Focus:  
深田晃司という才能」にて上映!

3月5日(土) 12:10  
@シネ・ヌーヴォ

3月8日(火) 21:00  
@シネ・ヌーヴォ

<プログラム>

- 司会 深尾淳一 (映画専門大学院大学)
- 趣旨説明 篠崎香織 (北九州市立大学)
- ゲストスピーカー  
深田晃司 (『歓待』監督)  
杉野希妃 (『歓待』プロデューサー・主演)
- パネリスト  
宋録琳 (映画専門大学院大学)  
「日本の国境の "Inside & Outside"」  
西芳実 (立教大学)「夏希のインコ探し」  
山本博之 (京都大学)「花太郎に操られる輪転」

日時：2011年3月13日(日)  
16:15～18:15 (16:00 開場)

場所：AP 梅田大阪 A ルーム  
<http://www.ap-umeda.com/>

## シンポジウム

# 映画『歓待』を テツガクする

### ——主客不分明の時代 における包摂と排除

#### ● パネリスト

宋録琳(そう ちゃーりん)

台湾出身。台湾国立台北芸術大学演劇学部(専攻:舞台監督)卒業後、新聞社、劇団、テレビ業界勤務を経て、映画専門大学院大学卒業。現在、アジア圏の映画・ドラマを扱う配給会社で働く。日本、台湾、香港などのアジア映画と比較文化に興味を持つ。

西芳実(にし よしみ)

立教大学 AIIC 助教。専門はインドネシアの地域研究/現代史。研究テーマは多言語・多宗教社会における災害や紛争への対応過程。現在、人道支援団体と地域研究者の連携による紛争・災害研究の方法を模索中。紛争地における文芸作品に関するエッセイに『犠牲者の物語』を乗り越えて(『すばる』2008年5月号)がある。

山本博之(やまもと ひろゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はマレーシアの地域研究/現代史。主な研究テーマは文化芸術を通じた民族・混血者概念の表象。共著に『現代東南アジアにおける映画』(Film in Contemporary Southeast Asia: Cultural Interpretation and Social Intervention、Routledge 刊、2011年8月刊行予定)がある。

#### ● 『歓待』

2010年/日本/96分

脚本・監督・編集:深田晃司

出演:山内健司、杉野希妃、古舘寛治

下町の印刷所を舞台に、つましく暮らす一家の元にフラリと現れた闖入者。それに巻き込まれ振り回されて変化していく人々。感傷を排した演出、人と人との関係性から現代日本の本質を掴み、世界をすくい取る。深田晃司監督とプロデューサーも兼ねる国際派女優・杉野希妃、そして劇団「青年団」の演技派俳優たちによる映画にしか成しえないテツガク喜劇!

2010年東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門作品賞、2011年ロッテルダム国際映画祭スペクトラム部門、香港国際映画祭正式招待。

(大阪アジア映画祭 HP より)

人の移動が著しい現代社会では、自分が生れた場所だけで生涯を過ごす人は少数派と言えるでしょう。共同体の境界が緩やかになりつつある状況で、ほとんどの人は、自分がある土地で異邦人になる可能性も、また自分が地元民として異邦人を迎える可能性も持っています。

人はどのようにして自分が訪れた土地で「私はここにおいてよい」と思えるようになり、また、他の土地から訪れた異邦人を「ここにおいてよい」と思えるようになるのか。異邦からの訪問者を無条件に受け入れて歓待できるのかという問いは、形を変えながらも時代や地域を超えて問われ続けてきました。この問題は、家庭や町内会での人間関係から国籍や移民・難民の問題に至るまでさまざまなレベルでの広がりがありますが、それらは包摂と排除という観点から同じ位相で捉えることができます。

映画『歓待 (hospitalité)』は、日本の下町における家族や町内会の人間関係を描きながら、異邦からの訪問客を受け入れ、相手の心のうちが読めない他人と一緒に生活の場を作っていくにはどうすればよいかという今日の世界に共通の問題を投げかけています。このシンポジウムでは、『歓待』の監督とプロデューサー・主演のお二人をゲストスピーカーに迎えて、マレーシアや台湾の経験に照らして比較しながら『歓待』をテツガク的に読み解く試みを通じて、誰が主人で誰が客かが明確に決められない混沌とした時代においていずれの立場の人も納得するような共生の手掛かりを探していきます。

主催: 京都大学マレーシア映画文化研究会  
京都大学地域研究統合情報センター共同研究  
「大衆文化のグローバル化に見る包摂と排除の諸相」

#### ● ゲストスピーカー

深田晃司(ふかだ こうじ)

映画監督。02年に長編映画『椅子』を初監督。05年に劇作家・平田オリザが主催する劇団「青年団」に演出部として入団。07年『ざくろ屋敷』で注目を集め、09年『東京人間喜劇』はローマ、パリの映画祭で正式招待され、シネ・ドライブ 2010 大賞受賞。

杉野希妃(すぎの きき)

女優・プロデューサー。慶応大学在学中にソウルに留学、『まぶしい一日』(キム・ソンホ監督)でデビュー。『クリアネス』(篠原哲雄監督)で主演を務め、日本でも活躍。『避けられる事』(エドモンド・ヨウ監督)や『マジック&ロス』(リム・カーワイ監督)ではプロデュースも手掛ける。



#### ● マレーシア映画文化研究会について

URL: <http://malaysia.movie.coocan.jp/>

マレーシアでは、これまで長く、国民の多教派であるマレー人を描いた映画しか作られてきませんでした。多民族社会マレーシアの現実を反映させてマレー人以外の民族やマレー語以外の言語を積極的に盛り込むと、「マレーシア映画ではない」と判断され、国内での上映の機会が制限されていました。このような状況で、2000年頃から登場した「マレーシア映画の新潮流」と呼ばれる若手の映画監督たちは、多民族性を積極的に描いた作品を制作してきました。彼らははじめから国内での上映をあまり期待せずに映画を制作し、その公開先はしばしば外国の映画祭となりました。そのため、たとえ監督の個人的な経験やマレーシア社会に特有のできごとが素材にされていたとしても、マレーシアという固有の土地に由来する描写は「脱色」され、地域や時代を超えたテーマとして表現されることで世界の人びとが観てわかる作品になっています。そのため、日本でもよく知られたマレーシア人監督であるヤスミン・アフマド監督の『細い目』や『タレントタイム』のように、マレーシア「新潮流」映画は、マレーシアのことをよく知らなくても内容を十分に理解して楽しめる作品になっています。だから、まずは映画を観て楽しめばそれでよいのですが、その上で私たちは、マレーシア社会について理解した上で作品を読み解くことにより、私たちの社会と同じ根を持つ課題がマレーシア社会でどのように表われ、それに対してマレーシアの人たちがどのように取り組んでいるかを浮き上がらせることができると考えています。そうすることで、一歩近づいて作り手の気持ちが理解でき、映画を観たときの楽しさがいっそう増すだろうと思います。マレーシア映画文化研究会では、マレーシア映画を通じて今日の世界のあり方について考えています。

### 『歓待』上映情報

大阪アジア映画祭 2011

「特集企画 Directors in Focus : 深田晃司という才能」にて上映!

3月5日(土) 12:10

@シネ・ヌーヴォ

3月8日(火) 21:00

@シネ・ヌーヴォ

シンポジウム会場

AP 梅田大阪 A ルーム

〒530-0002

大阪市北区曽根崎新地 2-3-21ax ビル 4 F

JR「大阪」駅下車 中央口より徒歩約5分

JR 東西線「北新地」駅より徒歩2分

地下鉄四ツ橋線「西梅田」駅 9番出口

(ドージマ地下センター入口横)より徒歩1分

電話: 06-6346-3001

<http://www.ap-umeda.com/>